

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32617

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13212

研究課題名(和文) 偏見の低減のための教育 - ヒューマンライブラリーの効果研究

研究課題名(英文) Education to reduce prejudice: Research on the effect of the Human Library

研究代表者

坪井 健 (tsuboi, tsuyoshi)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：00119108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヒューマンライブラリー(以下HLと略す)の効果に関する初めての本格的な研究である。1.人間図書館の仮想演劇空間における親密な対話が、偏見の低減に効果的である理由を既存理論や独自考察によって明らかにした。2.再参加希望率が「読者」役「本」役ともに95%以上あり非常に好意に受容されていた。3.実証的データからは、偏見の低減効果も大きい。自己拡張効果やナラティブ効果の大きさが明らかになった。4.HLの教育的効果、効果的対話条件、HLの持続効果に関する多くの知見を得た。5.実践的活用事例からは目的や対象、文化的背景によるHLの違いも明らかになり、今後の可能性に関して新たな知見を得た。

研究成果の概要(英文)：This study is among the first of its kind to examine the effects of the Human Library (hereafter, the HL). It makes five significant contributions. First, the study draws on existing theoretical frameworks and unpacks the reasons why the intimate dialogue in the virtual theatrical space of the HL is effective in reducing prejudice. Second, the study indicates that more than 95% of the HL participants (i.e. Readers and Books) across Japan were in support of the Library and showed their willingness to participate in it again. Third, empirical data indicates that the HL has not only prejudice reduction effect, but also self-efficacy effect and narrative effect. Fourth, the study addresses issues of educational impacts, sustained outcomes, and conditions necessary for productive dialogue. Finally, practical aspects of the HL are considered from the viewpoints of the diversification of purpose, target and cultural context, and further expansion of the potential in the HL.

研究分野：社会心理学

キーワード：偏見の低減 親密な対話 人間図書館 生きている図書館 演劇的仮想空間 異文化間能力 社会関係
資本 ナラティブ効果

1. 研究開始当初の背景

2000年にデンマークで偏見の低減に効果的なイベントとして開始され、2015年には世界約60カ国で実践されるに至ったヒューマンライブラリー(Human Library、当初はLiving Library、和名「生きている図書館」ともいう。以下HLと略す)は、日本には2008年に上陸し、その後各地で開催されるようになったが、世界的に見てもイベントとしての実践が先行し研究的アプローチはほとんど見られなかった。わが国では東大を始め大学関係者によって実践されることが多かったために、HLの実践が異文化間教育学会などの学会を通じて研究者の間で拡がり、2012年ごろより実践的研究が学会発表などに見られるようになった。そうした背景の下、偏見の低減などの教育的効果に関する実証的かつ理論的研究の必要性が認識され、2010年頃よりHLに本格的に取り組んできた坪井・横田・工藤の3名によって、この度の挑戦的萌芽研究として初めて本格的な学術探求を開始することになった。

2. 研究の目的

本研究では、HLが、多様性に寛容な社会をつくる教育的ツールとして世界で利用されている割には、偏見低減のメカニズムや効果的条件に関する学術的研究はこれまでほとんど見られない現状に鑑み、以下の目的で研究を行った。

- (1)「本」「読者」「司書」(主催者)の三者で構成されるHL(人間図書館)の構造が、どうして偏見低減に効果的なのか。偏見の低減や持続的効果およびそのメカニズムについて、既存の社会心理学理論と関連させつつ実証的に明らかにすること。
- (2)本の語りは「本」自体の肯定的自己概念への変容、つまり「ナラティブ効果」を持つと考えられるが、仮想空間での語りが自己概念の変容をもたらすメカニズムを明らかにすること。
- (3)HLの対話空間が如何に共感性や気づき、偏見の低減や自己概念の変容に効果的なのか。これらに関する理論的実証的分析を試みる。
- (4)国内と海外(特に豪州と)のHL実践形態の比較から、状況的背景や実践目的の違いが、HLの多様な展開にどんな可能性があるのかを明らかにすること。

3. 研究の方法

1. 偏見の低減理論、ナラティブアプローチ、社会心理学、演劇論、対話の哲学、現象学的社会学などを中心に関連する理論研究や実証研究の文献調査を行った。
2. 偏見の低減効果に関する質問紙法を中心に「読者調査」「生きた本調査」を2015年11月から2017年5月まで15回のHLイベントを対象に継続的に行った。その他、2016年か

ら2017年にかけて、一部「本」「読者」「司書(主催者)」への面接調査を行った。

3. 2016年には、一部の「読者」に偏見の持続効果に関する事後の質問紙法による調査を行った。

4. 2016年には、豪州HL主催者への聞き取り調査を実施し日本HLとの比較研究を行った。

5. 2017年には、HLの対話場面の参与観察を行った。さらに、2016年HL研究大会や2018年HL学会大会を開催し、HL主催者の報告や意見聴取を研究資料として活用した。

4. 研究成果

(1)参加者アンケート調査。2015年11月～2017年5月までに各地で開催されたHL参加者(読者・本)に無記名のアンケート調査を実施した。

15開催分の読者調査の結果。サンプル数540の内、20代38%で最も多く、30代・40代・50代が15%～17%、10代・60代が6%である。性別(性自認)では女性が60%。職業別では、勤め人・自営が36%、次に学生33%を占める。HLイメージでは、「そう思う」と「ややそう思う」を含めて「面白い」96%で最も多く、「誠実な」89%、「身近な」85%、「明るい」82%、「優しい」75%と続く。体験前後のイメージ変化で最も変化量が大きかったのは、「明るい」42.2ポイント、次いで「優しい」29.8ポイント、「身近な」25.7ポイント、それぞれ上昇しており、HLは「面白い」イベントであるが、体験によって「明るい」「優しい」「身近な」イメージに大きく変化する様子が見られる。HL体験は本への「関心の強さ」「近づきやすさ」「共感性」を高め、「不安」や「怖さ」を弱める効果が見られた。参加者の99.7%がまた参加したいと回答し、「参加したくない」回答は皆無であった。

11開催分91名の「生きた本」調査結果。「また参加したい」「読者に理解された」という回答が100%あり、「自己開示の大切さ」「自分を見つめ直すきっかけ」「生きる希望・勇気を得た」が、「そう思う」「少しそう思う」を含めて90%以上あり、「わかってもらえない」「30分ではムリ」「気分が滅入った」はいずれも10%以下でしかなかった。こうした調査結果から、「生きた本」のHLでの語りの効果の大きさが「読者」効果以上に大きいことが見て取れる。

(2)明大HL参加者の10か月後の追跡調査からは、「明るい」「優しい」「身近な」イメージの後退はみられるが、本に対する関心の強さ「近づきやすさ」「親しみ」は体験直後より強まる傾向がみられる。HL体験者への偏見の低減効果が見られることが明らかになった。この調査の概要は、日本ヒューマンライブラリー学会ホームページの会員専用ページ上で公開されている。

<http://www.humanlibrary.jp/>

(3)HLでは、対話人数を本1に対して読者

1又は3~5人程度を許容しているが、読者1人で実施した明大HLと複数人で実施している他のHLの場合でどんな差が見られるかを比較検証した結果、「1対1」の場合「同情心」が弱まるが、「1対多」では「同情心」が強まるという逆の結果が見られた。「共感性」はあまり変わらないが、「本への怖さ」の弱まりは「1対1」の方が大きいという結果が見られた。「親しみ」も「1対1」の方が大きい傾向が見られた。理論的にも三人関係と二人関係では二人関係の方が親密さが高まるという研究(Simmel,G.)があるが、それを裏図ける結果とも言える。

(4)日本の各地で開催されているHL主催者(川口・新潟・長崎)へのインタビュー調査や海外(豪州)のHL主催者調査や参与観察調査、さらには海外(デンマーク)HL参加経験者へのインタビューなどからは、HL開催の文化的背景、開催意図、開催形態に多様性が見られた。日本の場合、大学文化の中でHLが発達してきたために、学生の教育目的で開催されることが多いが、海外では市民団体が多様な市民啓発を目的に開催することが多い。開催形態は、HLは「対話」が行われる「直接空間」をどのようにデザインするかによって「公共型」、「カスタマイズ型」、「トレーニング型」に区別できるが、欧州では「公共型」として発達したHLだが、日本では学生への「トレーニング型」が多く、今後はカスタマイズ型の拡大が見込まれる。さらに、文化的背景の違いからか、西欧では「本」と「読者」間に緊張的対話が見られるが、日本では、事前に本を傷つけないという同意書を求めるなど共感的傾聴を重視する傾向が強い特徴があることも明らかになった(工藤、2018)。

(3)理論的アプローチからは、異文化への感受性を高め、柔軟性・寛容性を育む異文化間能力の育成効果が明らかになった(坪井、2017)。「本」のナラティブ効果からは、自信の回復、新たな勇氣、対人関係の再構築に寄与するメカニズムも明らかになった。読者効果については、Allport,G.W.らの偏見の低減の接触仮説にHLメカニズムに適合性が見られた。HLによるPettigrew,T.F.らの偏見の低減のプロセスモデルの修正図式も明らかにされた(坪井、2017)。さらに学生教育の観点からは、「司書」効果としてアクティブラーニングの有効性も確認された(横田、2018)。HLの「対話」空間は、Buber,M.の対話の哲学との整合性、現象学的社会学からは「視界の相互性」による解釈可能性、演劇的視点やパーソナルスペースからの分析も明らかにされた(坪井、2018)。また、コミュニティ活性化にHLがブリッジ型社会関係資本の育成に資すること(坪井、2018)などが明らかになった。

(4)本研究過程で、2016年10月には「HL研究大会2016」を開催し、多くの実践者との研究交流の機会を得た。その翌年2017年10

月)には「日本ヒューマンライブラリー学会」および学会ホームページを立ち上げ、多くの関係者と研究と実践交流の機会を得て、本研究を成熟させる貴重な機会になった。こうした実践と研究交流の成果は、2018年2月に日本のみならず海外を含む23人の協力者を得て本研究の3人の共同研究者が編者となって刊行した『ヒューマンライブラリー 多様性を育む「人間を貸し出す図書館」の実践と研究』に結実している。これは世界でただ一つの公刊されたHL研究書であり、今後ヒューマンライブラリーの実践並びに研究の礎としてさらなる発展に貢献することになる。

5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線) 【雑誌論文】(計1件)

坪井 健(2016)「ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力 コンピテンシーを育てる実践の立場から」(査読無し)『異文化間教育』第45号 pp65-77, 異文化間教育学会

【学会発表】(計12件)

(1)横田 雅弘・坪井健・工藤和宏(2018)共同発表「ヒューマンライブラリーの多様性とその効果」『2018年異文化間教育学会第39回大会発表抄録』pp.122-123, 2018年6月10日, 新潟大学

(2)坪井 健(2017)基調報告「ヒューマンライブラリー研究と実践 その現在とこれから」『日本ヒューマンライブラリー学会第1回(設立)大会』2017年10月15日, 駒沢大学

(3)工藤 和宏(2017)研究発表「日本のヒューマンライブラリーの課題と展望 海外の実践に学ぶ」『日本ヒューマンライブラリー学会第1回(設立)大会』2017年10月15日, 駒沢大学。

(4)坪井 健(2017)ポスター発表「ヒューマンライブラリーによる多様性に寛容なまちづくり 東京都世田谷区における実践プランの紹介」『日本ヒューマンライブラリー学会第1回(設立)大会』2017年10月15日, 駒沢大学

(5)横田 雅弘(2017)ポスター発表「明治大学ヒューマンライブラリーの作り方」『日本ヒューマンライブラリー学会第1回(設立)大会』2017年10月15日, 駒沢大学

(6)坪井 健(2017)「ヒューマンライブラリーを読み解く 対話世界の構築と視界の相互性」『2017年度異文化間教育学会第38回大会抄録』pp.64-65, 2017年6月17日 東北大学, 異文化間教育学会

(7)横田 雅弘(2017)「ヒューマンライブラリーの効果 「読者」アンケートを中心として」

『2017 年度異文化間教育学会第 38 回大会抄録』pp.66-67,2017 年 6 月 17 日 東北大学, 異文化間教育学会

(8)工藤 和宏(2017)「ヒューマンライブラリーの多様化とアフォーダンス 「他者」との対話の効果はどこにあるのか」『2017 年度異文化間教育学会第 38 回大会抄録』pp.98-99,2017 年 6 月 17 日 東北大学, 異文化間教育学会

(9)坪井 健(2016)「多様性に寛容な能力を育てるヒューマンライブラリー」『ヒューマンライブラリー研究大会 2016』2016 年 10 月 9 日, 明治大学中野キャンパス

(10)横田 雅弘(2016)「明治大学のヒューマンライブラリーとその効果」『ヒューマンライブラリー研究大会 2016』2016 年 10 月 9 日, 明治大学中野キャンパス

(11)工藤 和宏(2016)「オーストラリアのヒューマンライブラリー事情」『ヒューマンライブラリー研究大会 2016』2016 年 10 月 9 日, 明治大学中野キャンパス

(12)坪井 健(2016)「ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力 コンピテンシーを育てる実践の立場から」『2016 年度異文化間教育学会第 37 回大会抄録』p.20,2016 年 6 月 4 日 桜美林大学, 異文化間教育学会

【図書】(計 1 件)

坪井 健・横田 雅弘・工藤 和宏編著(2018)
『ヒューマンライブラリー 多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』,p.358(全)、明石書店

【その他】(計 3 件)

「ヒューマンライブラリー研究大会 2016」開催,主催:科研費挑戦的萌芽研究「偏見の低減のための教育 ヒューマンライブラリーの効果研究」研究班(代表坪井健、横田雅弘、工藤和宏)、2016 年 10 月 9 日,明治大学中野キャンパス,研究発表 3,ポスター発表 11,交流セッション,意見交換会等,参加者約 35 名

「日本ヒューマンライブラリー学会第 1 回(設立)大会」開催、2017 年 10 月 15 日、駒澤大学、HL 体験会,研究発表 3,ポスター発表 6 等,参加者約 70 名

ホームページの開設
「日本ヒューマンライブラリー学会」
<http://www.humanlibrary.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者
坪井 健 (TSUBOI, Tsuyoshi)
駒沢大学・文学部・教授
研究者番号:00119108

(2)研究分担者
横田 雅弘 (YOKOTA, Masahiro)
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号:90200899
工藤 和宏 (KUDO, Kazuhiro)
獨協大学・外国語学部・専任講師
研究者番号:70364726